

世界を視野に、地域一帯となり 航空宇宙産業への本格参入を目指す

世界の民間航空機産業の市場規模は年間二六兆円。旅客需要の増加を背景に、二〇年後には約八〇兆円と、二桁成長が期待される。素材から加工、組立、生産設備、サービス分野まで、産業のすそ野が幅広く、異業種との技術相乗効果も大きい。その航空宇宙産業分野を次世代の産業の柱に据える三重県のナビゲーター役に抱負をうかがった。

——愛知県と岐阜県には日本の航空宇宙産業を代表する重工メーカーの生産拠点がありませんが。

雲井 戦時中には、三菱の軍需工場が鈴鹿、四日市、津などに置かれ、零戦や一式陸攻などの部品生産や機体の組み立てが行われていましたが、終戦とともに全て撤収されました。三重県にも少数ながら航空関連業界で頑張っている企業が存在しているのですが、一

般に余り知られていません。

愛知県と岐阜県が「特区」指定に向けて動いているという情報が聞こえてきた時、県内の関係者にヒアリングしてみました。これに続くとういう気運が感じられませんでした。私としては、ボーイング787の生産拡大やMRJの開発計画が発表されるなど、中部圏の航空宇宙関連産業の拡大が予想されましたので、優れた技術を

持った県内企業がこの分野で活躍するためにも、特区の指定を受けざるべきであると思っていました。

しかし、企業と県が積極的に動かないことには、国の指定を受けることができません。そんな中、企業や県を回っていると、旗振り役が出てくるのを待っている空気を感しました。そこで、航空機に強い関心を持つ数人の企業経営者達とともに、「三重県の航空宇宙産業を考える会」を二〇一一年七月に立ち上げました。当初、三重県で本格参入したいと考えている企業がどれだけあるのか分からなかった。「考える会」と一歩引いた名称にしたのですが、一四年になると、航空宇宙産業に対す

る気運が高まってきたこともあって、「みえ・航空宇宙産業推進協会」という名前に改称しました。

このような会のリーダーにはメーカーの経営者が就くことが多いのですが、三重県の場合は地元地方銀行系シンクタンクの代表者である私が就任することとなりました。広く情報を提供できる立場にあることに加え、私自身飛行機が好きで、実際にグライダーやヘリを飛ばしていたので、幅広い業界人脈を持っていたからです。金融や物流など様々な業界の方にも加わっていただき、三五社程でスタートしましたが、その後参加を希望する企業が増え、現在会員数は五〇社になりました。県も協力